



もう一步、貧困のない世界へ

2009年7月31日採択

「動く→動かす」2009～2010年度 事業方針

1. 世界の貧困を取り巻く状況

極度の貧困を半減するとしてミレニアム開発目標が2000年に合意されてから10年以上が経ち、目標達成期限の2015年まで、残すところ3分の1となりました。MDGsは不完全な目標ながらも、特に途上国政府に貧困層重視の政策を採らせる上で、また先進国の開発援助をはじめとした、途上国に影響を与える様々な政策の是非を問う上でも、貴重なアドボカシー・ツールとして機能してきました。そして、教育やHIV/AIDS、所得貧困などにおいては、絶対数の上では実際に確実な状況改善が見られ、ODAの量・質に関しても、最近まで改善が見られました。

しかし、このように20世紀からの積み残し課題がゆっくりと解決に向けて動いたかに見えた矢先に、新自由主義経済の暴走による食料価格の高騰や昨今の金融・経済危機が立て続けに発生、MDGsに向けた進歩を台無しにしてしまいつつあります。また、気候変動の影響も確実に増しており、人々の健康や生計、人間安全保障に重大な脅威をもたらしつつあります。

2. 「動く→動かす」を取り巻く状況

(1) 「動く→動かす」の政策アドボカシー活動が置かれた文脈

以上のような状況は、国際政治の勢力図に大きな地殻変動をもたらしています。特にG8体制の形がい化とG14/20体制の台頭、国連を中心としたグローバル・ガバナンス再構築を求める貧困国の主張などが顕著になっています。こんな中、地球規模課題への対応能力低下が著しい先進諸国にとって、開発問題への応答力が、国際的な存在感を維持するためのバロメーター的な役割を担う状況になっています。しかし日本では、政治、制度、人々の意識が世界の変動に適応できておらず、開発問題の政治課題化、それに応じた政策や体制の改革が進まずにいるために、国際的な地位が低下し、これが内向き志向をさらに強める悪循環を起こしています。2008年北海道洞爺湖サミットでは、特に国際保健という限定的な分野において、この状況を打破しうる動きが政府周辺に起きましたが、政治がしっかりと認知・関与していなかったため、これを政治戦略化・制度化するには至っていません。そして2009年のラクイラ・サミットの顛末は、世界の変化が日本を待ってくれないことをまざまざと見せつけました。

ここ数年国政で流動的な状態が続いている背景には、日本の様々な制度疲労があるため、政策策定プロセスへのNGO参加度の改善、貧困問題の政治課題化、開発政策の抜本的改革などを実現するためには、国政の変動に機動的かつ戦略的に対応し、「動く→動かす」の目的に適った方向に変革の流れに影響を及ぼせるようになる必要があります。

(2) 「動く→動かす」のパブリック・モビライゼーション活動が置かれた文脈

日本社会における世界の貧困問題に関する認識・関心は、高いとは言えません。その背景には、関連する情報に接する機会が大変少ないこと、また、入ってくる情報も、「自分たちとは違う」遠い世界の出来事として描かれたものが多く、日本と途上国との構造的なつながりを描くものは大変少ないために、関係や共感や連帯感が呼び起こされる機会も少ないことがあります。そのため、世界の貧困問題が国内で広がりつつある貧困や不平等の問題と関連付けて議論されることも少なく、「日本の貧困対策か途上国支援か」というように、不適切な二項対立で捉えられることも少なくありません。



もう一歩、貧困のない世界へ

また、たとえそのような事実を知識として知りえたとしても、日本社会における市民一人一人の政治的エンパワーメントは、諸外国と比べて決して高いとは言えず、社会問題に対して自らの声や力で政治を動かすという意識や自信が、広く共有されていません。このことは、貧困問題に比べて認識が広まっている環境問題に対する市民全般の態度を見ても明らかで、あらゆる行動の選択肢がしっかりと検討されないまま、「自分の手の届かないことをしても意味がない。自分の生活の中で個人的にできることをやるだけ」という結論に落ち着く人が多いようです。

しかし、極度の貧困や不平等のない世界に近づくためには、専門的かつ具体的な政策提言に加え、そのような政策変更を支持する世論の創出が不可欠です。貧困問題が倫理的に許され難い問題であること、世界の持続可能性への脅威となること、また先進国にも解決の責任があることを「あたり前」と思う市民が増え、世論の主流となっていく必要があります。世論の後押しなくしては、「動く→動かす」が行う政策提言も一部の意見としてしか認識されず、政策変更そしてその実行に結びつきません。

したがって、「動く→動かす」は、「動く→動かす」のメッセージに賛同する人々を増やすと同時に、貧困問題を自らと関係し、また自らの行動で変えられる問題として捉え、自主的に行動する市民の育成を促す必要があります。

(3) 「動く→動かす」の成長

「動く→動かす」(GCAP Japan)は、政策アドボカシーやパブリック・モビライゼーションが最も必要とされている現代日本に、時宜を得て誕生しました。

NGO が力をあわせてアドボカシーとパブリック・モビライゼーションに取り組んだ G8 洞爺湖サミットの終了直後の 2008 年 8 月、世界の貧困に取り組む日本の NGO の連合体として新生 GCAP Japan を発足させるため、「GCAP Japan 移行検討委員会」が NGO 有志によって設立され、新生 GCAP Japan の在り方を2カ月にわたって集中的に検討し、答申を作成しました。その後、移行検討委員会は「GCAP Japan 準備委員会」に再編され、半年間をかけて設立の準備を行いました。果たして、2009 年3月5日、42 団体の参加の下に「貧困のない世界の実現をめざすネットワーク日本」として、GCAP Japan が設立されました。

設立総会では、6名の運営委員が設立され、集中的に会合を持って、GCAP Japan のガバナンスにあたりました。また、実施チームとして「政策チーム」「パブリック・モビライゼーション・チーム」「TICAD アドボカシーチーム」の3つのチームが設立され、お互いに連携しながら、各チームの活動を積極的に行いました。5月末には、ついに「動く→動かす」が正式名称として採択され、ロゴも確定しました。これを踏まえて、6月17日、200名近い参加のもと、『動く→動かす』設立記念シンポジウム：アフリカこどもの日に考える』が開催されました。事務局は(特活)アフリカ日本協議会が担い、これらの活動のベースを支えました。これらの活動は、参加してくださった多くの NGO の温かいご協力、ご支援に支えられたものです。

このように急速な組織的成長を遂げてきた「動く→動かす」ですが、このネットワークが日本の市民社会における MDGs 達成、貧困の解消のための政策アドボカシーとパブリック・モビライゼーションの要となっていくためには、組織基盤・財政基盤の安定化と、関係他セクターとのより広く、深いネットワーク構築が不可欠です。10 月には、「動く→動かす」のパブリック・モビライゼーション活動の要とも言うべき「スタンド・アップ テイク・アクション」が開催されます。こうした機会を活用して、これら組織基盤の強化や認知度の拡大、他セクターとの連携強化に取り組む必要があります。

3. 「動く→動かす」の 2009～2010 年活動計画

「動く→動かす」の事業は、運営委員会の承認を得た実施チームが中心となり、チーム間の連携を図りながら、実施されていきます。2009年7月現在、『政策チーム』、『パブリック・モビライゼーション・チーム』、『TICADアドボカシーチーム』の3つのチームが設立され、正会員・フレンズ・サポーター会員及び事務局により運営されています。以下は、「動く→動かす」の活動期間第1フェーズとなる2009～2010年においての、以下の達成目標、活動分野、活動内容を示します。

(1) 2009～2010年達成目標

- A. ODAの量・質の向上に向けた政治・メディア環境を整備する。(政策アドボカシー)
- B. 世界の貧困の解消を自らの問題として捉え、行動する市民が、つながりを持ち活動できる環境を創る。(パブリック・モビライゼーション)
- C. 世界の貧困の解消に関しを持つNGO間のネットワークを強化し、他セクターとの連携の下、「貧困をなくそう」というムーブメントを、日本社会に芽吹かせていくための基盤を整備する。(組織形成・ガバナンス)

(2) 政策アドボカシー活動分野

- A-1. 国際的な貧困問題への政策的取り組みを優先する国会議員の育成
- A-2. 政治・政策課題としての貧困・開発問題のマスコミ上での露出の拡充
- A-3. ODA 予算の増額と質の改善に向けた政策提言の実施
- A-4. TICAD(アフリカ開発会議)プロセスを通じた対アフリカ開発政策への政策提言の実施
- A-5. 非 ODA 課題に関する「動く→動かす」の政策能力の強化、もしくはそれら課題に取り組む NGO との連携強化

(3) パブリック・モビライゼーション活動分野

- B-1. 貧困問題にすでに関心を持っている人が「動く→動かす」と共に活動を展開できるためのスキル・情報の提供、活動環境の整備
- B-2. 世界の貧困の解消に向けたポピュラーな運動の創造、市民参加の機会の拡充
- B-3. 政策と連動したアクションの実施

(4) 組織形成・ガバナンス・広報分野

- C-1. 「動く→動かす」のパブリックイメージの構築
- C-2. 世界の貧困の解消に関心を持つ多くの NGO の参加促進及びネットワークの強化
- C-3. 確実で安定的な財政基盤の構築
- C-4. 「世界の貧困を解消する」という目的を共有する、多くの他セクターの人々や組織との連携を強化

以上

【参照】活動内容詳細

活動分野	活動内容	実施体制/備考
達成目標A.		
A-1.国際的な貧困問題への政策的取り組みを優先する国会議員の育成	<ul style="list-style-type: none"> 援助体制や政策について、定期的な政策対話の実施 	政策チーム
A-2.政治・政策課題としての貧困・開発問題のマスコミ上での露出の拡充	<ul style="list-style-type: none"> メディア関係者との関係構築 メディア向け勉強会の実施 	政策チーム/パブモビチーム
A-3.ODA 予算の増額と質の改善に向けた政策提言の実施	<ul style="list-style-type: none"> 政治家、外務省、財務省へのロビイング G8、G20、TICAD 関連会議、2011 年援助効果会議などの機会の活用 	政策チーム/パブモビチーム
A-4.TICAD(アフリカ開発会議)プロセスを通じた対アフリカ開発政策への政策提言の実施	<ul style="list-style-type: none"> TICAD 共催者との政策協議(ラウンドテーブルの実施) アフリカ市民社会との連携、合同会議の実施 TICADフォローアップ会合への参加、提言 	TICADアドボカシーチーム/政策チーム
A-5.非 ODA 課題に関する「動く→動かす」の政策能力の強化、もしくはそれら課題に取り組む NGO との連携強化	<ul style="list-style-type: none"> CAN-J/Make the Rule/生物多様性ネットワーク関係諸団体との関係構築を通じ、連携の可能性を模索 	政策チーム
達成目標B.		
世界の貧困の解消を自らの問題として捉え、行動する市民が、つながりを持ち活動できる環境を創る。		
B-1.貧困問題にすでに関心を持っている人が「動く→動かす」と共に活動を展開できるためのスキル・情報の提供、活動環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> 「貧困の仕組みを理解し、アドボカシーを理解・実践する個人を育成するプログラムの実施 MDGsの重要性・進捗が単なる国際目標としてではなく、途上国の人たちの現状から理解でき、その解決に向けた行動を考えるきっかけとなるツールを製作 	パブモビチーム
B-2.世界の貧困の解消に向けたポピュラーな運動の創造、市民参加の機会の拡充	<ul style="list-style-type: none"> Stand Up Take Action の継続的な実施(2015年まで毎年) 南アフリカで開催されるワールドカップの機会に向けた、アフリカ&MDGs への関心を高めるプログラムの実施 	パブモビチーム
B-3.政策と連動したアクションの実施	<ul style="list-style-type: none"> ウェブや他セクターとの連携を通して、国内外の重要な政策決定時期に合わせた、アドボカシーアクションの企画・実施 GCAP グローバルと連携した、パブリック・モビライゼーションの実施 	パブモビチーム/政策チーム



もう一歩、貧困のない世界へ

達成目標C. 世界の貧困の解消に関しを持つNGO間のネットワークを強化し、他セクターとの連携の下、「貧困をなくそう」というムーブメントを、日本社会に芽吹かせていくための基盤を整備する。		
C-1. 「動く→動かす」のパブリックイメージの構築	<ul style="list-style-type: none">• 広報、ブランディング戦略の作成、実施• コミュニケーション・ツールの整備(ウェブ、リーフレットなど)	事務局/パブモビチーム
C-2. 世界の貧困の解消に関心を持つ多くのNGOの参加促進及びネットワークの強化	<ul style="list-style-type: none">• パートナーシップフォーラムの開催	事務局/運営委員会/各チーム
C-3. 確実で安定的な財政基盤の構築	<ul style="list-style-type: none">• 自己財源を中心とした資金調達体制の構築• 他セクターとの協力• 個別事業に対する助成金の獲得	事務局/運営委員会
C-4. 「世界の貧困を解消する」という目的を共有する、多くの他セクターの人々や組織との連携を強化	<ul style="list-style-type: none">• 連携委員の選任、連携強化• 各セクターとの定期的な対話の実施	事務局/運営委員会